

『ゴールトン及びキャテルの生涯と その業績について』

高 嶋 正 士

まえがき

科学としての心理学が誕生して既に 105 年を経過した。これは心理学者ヴント（Wundt, W. 1832—1920）の業績によるものであって、それは従来のアリストテレス（Aristoteles）以来とられてきた思弁的形而上学的な、いわゆる哲学的傾向を排して自然科学的研究態度を積極的に取り入れたことであった。

心理学は人間の行動 behavior を科学的に研究する学問である。それは個々におけるすべての行動を研究する学問であり、また他人の行動を予知したり、統制したりする人間の能力を高めることを目的とするものである。

心理学の誕生は、かつて原始人が自分自身に対して、あるいは彼の仲間に対して好奇心をもったことに始まるといってよからう。科学としての心理学は、その方法がそれほどおもだったものではないにしろ、古くから存在していた。初期のギリシャ時代の哲学者たちはこの学問に多くの貢献をしてきたが、中世紀に至っては、その進歩はほとんどなかったといえる。ルネサンス時代も同様に、骨相学 phrenology や 人相学 physiognomy などの科学まがいのものが、科学の分野を支配する傾向にあった。

科学的な方法が心理学研究の根本的な技術として受け入れられたのは 19 世紀の後半になってからのことである。

今日における人間行動や特性の知識は、何もないところから突如としてあらわれてきたものではない。科学としての心理学は、比較的歴史は浅いが、心理学の基礎はかつて人間が自分と他人、そして彼らの活動を理解するために行った原始的な試みの中で築かれてきた。ギリシャ時代の全盛期には人間行動を観

察し、その結果得られた知識を体系化する試みがなされた。

19世紀まで一つの科学としての心理学は何らの進展もみられなかったが、ただ19世紀に至るまでの人相学、手相学、筆蹟学、占星学、読心術などは、多くの人々の人気を集め、その発展はめざましいものがあつた。ともあれ、心理学者たちはこのような精神科学的な体系化を手がけた学者たちの活動に悩まされていたようである。生物気候学者、人相学者というのは、知識、研究内容、資格そして訓練において科学的な心理学者とは異なるのである。心理学者は科学的方法を取り入れた専門技術によって養成されなければならない。これが現代心理学の姿である。

さて、現代心理学の基礎研究領域は多岐にわたっているが、その中に差異心理学 differential psychology がある。これは個人差の問題を扱う領域で、また個性心理学 psychology of individual ともいわれる。個人差を代表する問題といえば人格 personality と知能 intelligence をあげなければならない。これらの問題は心理学の基本問題である。

差異心理学の歴史は古く、また研究領域も広く遺伝学や環境学と深く関連している。差異心理学を代表する人は何といてもイギリスのゴールトン (Galton, F.)、アメリカのキャテル (Cattell, J. M.)、ドイツのシュテルン (Stern, W.) であろう。

本稿は差異心理学を体系づけ、現代心理学の発展に大きな影響をもたらしたゴールトンとキャテルのその生涯と業績について新しい資料によって論述するものである。(枚数制限のためシュテルンについては別の機会にゆづる)

I. ゴールトンの生涯とその業績

Sir Francis Galton (1822—1911)

ゴールトンは心理的遺伝や人間の能力に関する個人差の問題について立派な仕事をし、将来の心理学を支えるべき発展に貢献した。ゴールトンの努力に先立って、個人差の現象は心理学上重要な研究課題ではなかった。確かにその分野に関する過去の経緯について重大な手ぬかりがあつた。このことは彼の時代

以前にもあった。とりわけ、個人差の研究を報告したウェーバー（Weber, E. H. 1795—1878）、フェヒネル（Fechner, G. T. 1801—1887）、ヘルムホルツ（Helmholz, H. L. 1821—1894）がそうであった。しかし彼らはそれを系統的には研究しなかった。そして我われが見てきたようにヴントとティチナー（Titchener, E. B. 1867—1927）は、心理学の一分野であるべき個人差の問題を考慮しなかったのである。

1. ゴールトンの生涯

著しく高い知能（I Q 200 とみなされる）と豊富で奇抜な考えをもつ彼は、恐らく現代心理学の歴史において匹敵する者がいないであろう。彼の高い創造的な好奇心と素質は、新しい問題の多様性に関心を示し、他方面についても興味をもっていた。彼が研究した領域は指紋（Scotland Yard では指紋はみな同じであるという見解がもたれていた）、流行、女性の美しさの地理的分布状態、重力あげ、家系の前途（将来）、祈りの有効性に関する実験的研究であった。それは、このようなことを多方面に発明した人には関心がうすかったようである。

ゴールトンは1822年に、イングランドのバーミンガムの近くで9番目の末子として生まれた。彼の父は繁昌する銀行家であった。裕福で社交的で卓越した家族は、下院議員、牧師、陸軍大将等の全領域で大きな影響力をもつ重要な人びとであった。それゆえ、幼少のころからゴールトンは、彼の家族や親類の中でも多くの影響をもつ人と知りあいになることができた。

16歳のとき父の主張で、ゴールトンはバーミンガム総合病院の寄宿生として医学の勉強をいやいやながら始めた。彼は病院の医師の見習として働き、丸薬を調剤し、医学書を読み、折れた骨を整骨し、指を切断し、歯をぬき、子どもたちに予防注射をし、Horace や Homer を読みながら気晴らしをしていた。ごく控え目にいっても、それは決して楽しい生活ではなかったようである。そして父から続けなさいという強制のみが彼をそこにとどまらせていたのであった。

病院で1年間修業した後、ゴールトンはロンドンの Kings College で医学教育を続けた。1年後、彼は計画を変更し、Trinity College に入学した。そこは、数学を専門とするニュートンの胸像が彼の暖炉にむかいあっていた。彼の研究は痛烈な精神的挫折で阻止されたとはいえ、首尾よく学位をとったのである。そこで簡単に医学の勉強を再び始めることになった。しかし、彼の父の死はこの職業から彼を放棄させてしまった。この職業は彼が極度に嫌っていたものである。

次にゴールトンの注意をひいたものは旅行と探検であった。彼は1845年にスーダンに、1850年に南西アフリカに旅行した。同年にテレタイプ印刷機を考案した。彼は旅行記を発表し、1854年に Royal Geographic Society は、彼に南西アフリカ探検に対してメダルを授与した。南西アフリカはその時代には全く未知の島であった。1850年に彼は結婚し健康を害したために旅行と探検を中止した。しかし、彼はいろんな委員を引き受けていたので、“The Art of Travel” と呼ばれる探検家たちのための旅行案内をかき、クリミア戦争の軍人訓練のための野営生活について講演を行った。

彼の精神の落ち着きなさは、次に気象学と気象データを計画する機械の設計へと導いたのである。彼の気象学的発見は一冊の本にまとめられ、それは広い尺度で天気類型を図示しようとする最初の試みであったわけである。従兄弟のダーウィンが『種の起源』を発表したとき、ゴールトンは早速新しい学説に大変に興味をもったのである。

2. ゴールトンの仕事

精神的遺伝：心理学に影響を及ぼしたゴールトンの最初の重要な仕事は、1869年に発表した『遺伝と天才』“Hereditary Genius” であった。彼の目的は、個人の偉大さあるいは資質が環境的影響を基礎として解釈されているのと同様に、発生頻度においても家系をたどっていくことを論証した。それゆえ、優秀な人が優秀な息子をもつということを主として、この書物に報告されている伝記研究は、有名で名高い人——科学者、医師、その他——の家系を調査し

たものである。ゴールトンの資料は、各事例ごとにそれらの人物には資質だけでなく、資質の特殊形態も遺伝していることを示している。たとえば、偉大な科学者は科学部門で著名な家系から生まれているというようにである。

ゴールトンの究極の関心は、より優秀で適合した生産力を奨励し、適合しない出産率を阻止することであった。この目的を達成させるために、彼は優生学の知識を求め、家畜類のように人間の家系が人為淘汰によって進歩させることができるということを主張した。もしも、相当の才能のある男女が選ばれ代々連れそっているならば、高い資質が与えられた家系には可能な結果が得られることを信じていた。

彼は優生学についての論文を立証しようとして、測定と統計の問題に非常なかかりあいをもったのである。『遺伝と天才』で、遺伝の問題に統計的概念を適用し、能力水準が母集団に現われる頻度によってサンプルを等級あるいはカテゴリーによって有名人を分類したことである。

ゴールトンは最初の書物に続いて“English Men of Science” (1874) と“Natural Inheritance” (1889) を出版し、また30～40の論文の中で遺伝の問題を扱っている。遺伝に関する彼の関心は、その家系の個人か一族の広がりを増大させ、ますます淘汰の繁殖によって人類を進歩させる可能性をもたせるようになったことである。その結果、1883年に彼は遺伝や優生学が科学に対して提案をしている。それが1901年に雑誌“Biometrika”の創設となり、また1904年にロンドンの University College の優生学研究室の設立となり、人類の進歩の目的を推進するための体制の基礎となったのである。これらのすべては現在もまだ活躍しているところである。

3. 統計的方法

ゴールトンの測定と統計に対する関心は既に注目されていた。彼の生涯を通してデータを数量化したり、統計的に分析することの意味を見いだすまで、問題を十分に把握しているとは思われなかった。統計的方法を使用する上で、彼は自分自身の何かを明らかにした。

ベルギーの天文学者 Adolph Quetelet (1796~1874) は、統計的方法と生物学的社会的データの平均確率曲線の両方を最初に適用した。平均曲線は早くから発見され、それが測定や科学的観察における誤差の分類研究に使用された。しかしながら、平均（曲線）分配の原則は人体測定が無作為に選ばれたサンプルである Quetelet の実証は、その特色として平均曲線が考えられるまでは人間の変異性の研究に適用しなかった。たとえば、彼はある1万の被験者の身長測定が、分配の平均曲線に等しいことを論証し次のような発見をするために *l'homme moyen*（平均人）という言葉を使用した。ほとんどの人間は平均か平均曲線の中心群にあって、中心から2つの端の方に離れば離れるほど少なくなるということを発見した。

Quetelet のデータに感銘をうけたゴールトンは、身体的特徴と同じく精神的なものにも同じ結果が得られると仮定した。たとえば、大学入試の点数が Quetelet の身体測定と同じように平均曲線分配を示すことを発見した。この曲線の単純さと沢山の特徴の一致のために、ゴールトンは次のことを計画した。測定的全範囲をわざと限定し、正確な2つの数字——分配の平均値とこの平均値付近の偏差の範囲あるいは散布（今日でいう平均と標準偏差）を要約した。このようにして測定の大体の傾向と人間の価値は、これらの2つの数字に意味ありげに換算される。

ゴールトンの統計学におけるもう一つの業績は科学の最も重要な尺度の一つとしての相関の問題につきるといってよかろう。彼が『相関』と呼んだ最初の論文は、1888年に発表されている。テストの妥当性と信頼性を決める現代的手法と因子分析法は相関の発見の結果にもとづいたものである。それは、遺伝した特徴がこれらの特徴の分配平均に逆行する方向にあるということはゴールトンの意見からでたものである。たとえば、平均して背の高い人は、その父親ほど高くはなく、一方、非常に背の低い人の息子は平均してその父親よりも高いことに気づいていた。彼は相関係数の基本的特性を表わす『表示平均』を発明し、更に長い間の使用にとどまらないとはいえその計算のための公式を開発した。

ゴールトンは身体測定における偏差，たとえば，身長と頭の長さの間の相関を証明する新しい方法を適用した。ゴールトンに奨励されて彼の弟子ピアソン（Karl Pearson）は，相関係数の正確な計算法のために使用される数学的公式を開発した。ピアソンの積差係数がそれである。相関係数の慣例の記号 r は，家系の遺伝における平凡さと平均に対する“regression”という言葉の頭文字をとったものである。

相関の概念は工学的（技術的）自然科学と同様に社会的行動科学においても根本的に重要である。多くの現代統計学的道具や手法はゴールトンの草分けの仕事から大部分が啓発されたものである。この意味においてゴールトンの業績は甚大というべきである。

4. メンタル・テスト

ゴールトンはある特定のメンタル・テストを開発した最初の人である。彼がメンタル・テストの考えを悉く創始したといっても過言ではあるまい。（言葉そのものは後にいわれるようになったが）

知能は知覚能力の一つの水準によって測定されなければならないと彼は最初に仮定したのである。このように知覚能力は知能と関係のあることを信じていた。知能が高ければ高いほど知覚識別力のレベルも高くなる。また，心理学的測定は多くの人にできるだけ早く正確に行われるべきであるという点から機械を考案している。特有の発明の才と熱心さで，感覚を測定する沢山の機械を発明した。きくことのできる音の最も高い振動数を測るために，彼は人間と同じように動物にもテストできる笛なるものを発明した。（街の中や動物園で動物を歩かせながら，くぼんだ歩行杖の一方の端を固定し，もう一方の端でゴム棒をもつ笛で実験した）

改良した形でこのゴールトン笛は，1930年代により複雑な電気器具にかわるまで，心理装置の標準品となったのである。

被験者がいかに正確に2つの色を調和させることができるかを測定する口径測定振子，筋肉運動の態度を測定するための重さの順に配列させる重量器，視

覚伸長の判断をテストする可変性距離尺度をもった棒、嗅覚の識別力をテストする一組のビン等々。彼のほとんどのテストは今日心理学研究室で使われている標準的な設備の原型となっている。

新しく考案したテストを準備として、ゴールトンは非常に多くの被験者のデータを収集した。これを遂行するために1884年に、“*International Health Exhibition*”で人体測定実験室を開設した。のちにロンドンの *South Kensington Museum* に移動させてこの実験室は6年間9,000人以上から広い範囲のデータを集めて活発に行っていた。人体測定と精神測定のための器械は限られた部屋の一方の端の長い机の上におかれ、3ペンスの入場料のために、ある人は測定を継続したり、データでカードを満たす人といっしょに実験された。使用された測定は、高さ、重量、呼吸力、ひいたり握ったりする力、殴打の敏捷性、聴力、視力、色彩感覚等である。

この大規模のテストプログラムの目的は、多くの特質や能力について、人間の才能の範囲を決定するためであった。ゴールトンは、イギリスの全人口をテストすることを希望した。それは初め、その国はその国の人びとの心理的素質の正確なレベルが知られているからである。メンタル・テストの開発と実験室の開設は、ゴールトンを当然心理学最初の開業者と呼ばれてもよいだけの仕事をしたからである。

5. 連 想

ゴールトンは連想の領域において2つの興味ある問題を研究した。それは連想概念の相違の研究と連想を生ずるために人を獲得する時間の研究であった。

可能な時はいつでも計算する彼の習慣に従って、連想の相違を研究する方法の一つは、トラファルガスクエアと *St. James Palace* の間を走りながらロンドンの *Pall Mall* 通りをとおって450ヤードを歩くことであった。歩きながら彼は一つか二つの連想概念をおもいつくまで物体に注意したのである。彼がこれを始めた最初は、自分がみた約300の対象についての多くの連想におどろかされた。これらの連想のほとんどは、長い間忘れられていた多くのできごと

を含めて過去の経験の想起の形であることがわかった。2～3日後に散歩を繰り返しながら、最初の散歩の時おこった連想の多数の再現とわかったのである。このことは、連想研究の方向づけに関心を少なくして、より有効な結果の得られる反応時間の実験へとかえていったのである。

ゴールトンは紙片1枚1枚に75語の表を用意し、1週間後にそれをだしてみた。同時に必要な時間を記録するクロノメーターを使って、各々の語に二つの連想が生ずる実験を行った。連想の多くは、個々のことばの形であったが、他のいくつかは一つの語としてではなく、描かれた沢山の語彙を必要とする精神的心像や表象としてあらわれたことである。

次にこれらの連想のもとになる因子の決定についての研究である。この多くは（約40%）幼児期や青年期の経験にさかのぼっていることがわかった。これは成人のパーソナリティーにおいて、人生の早期の経験とりわけ幼児期の経験の影響が大であることの証明の一つになるものである。けれども、もっと重要なことは、連想の実験的研究の導入であった。ゴールトンの『言葉の連想実験』の発明は、実験室的実験に対する subject 連想への最初の試みであった。その手法を修正したヴントは、答えをただ一つの語彙に限定してライプチヒ大学でこれを実験したのである。

6. 精神的心像

ゴールトンの精神的心像の研究は、心理学的質問表を広く使用していることである。被験者はその日の朝食の料理のように、場面を思いおこし、その場面の心像を引きだそうとすることを要求された。彼らはその心像がぼんやりか、はっきりしているか、明るいか暗いか、色彩があるかないか等を指摘させられた。その結果、ゴールトンのおどろいたことは、科学に面識のある最初の被験者群は、すべてははっきりした心像を報告しなかったことである。ゴールトンは被験者にその心像について質問した時、何を話しているのかを何人かのものは理解すらできなかった。より平均的能力をもった被験者を使いながら、別の心像を報告するという結果になった。

女性と子どもの心像は特に具体的で細部にわたっていることをゴールトンは気づいた。被験者が調査されればされるほど、ますます心像は多少母集団に正常に分配されることがはっきりとしてきた。

ゴールトンの仕事は、心像についての研究が最初であり一般にその研究成果は支持されている。彼の研究のすべてと同様に心像についての関心は遺伝の類似点を証明しようとするものであった。たとえば、心像の類似は関係のない個体の間よりも兄弟間の方が大きいことがわかったからである。

以上、ゴールトンの研究領域は心理学の発展に大きな影響を与えた。彼はその後も多くの研究を行ったが、我われは彼の才能の豊富さと多様性についてさらに指摘しなければならない。

ゴールトンが心理学部門で活躍したのはたった15年間であった。しかしながら、この短い期間での努力は心理学が将来進むべき方向に大いに影響を与えた。彼は真に心理学者というよりはむしろ優生学者であり、人類学者であった。

心理学者が適応、遺伝対環境、種の比較、子どもの研究、質問紙の使用、統計的手法、個人差の総括的問題、メンタル・テストの分野に興味を示すようになった先駆者としてのゴールトンを考えてほしい。このような点から Flugel と West (1964) は、「我われは2度と再び科学の歴史において、このように輝かしく、多方面にわたって興味と能力に巾広く偏見と先入観にとらわれない研究者に会うことはない」と称讃している。

Ⅱ キャテルの生涯とその業績

Cattell, J. M. (1860~1944)

キャテルはアメリカ心理学の発展とくに教育や産業面に大きく貢献した心理学者である。

アメリカ心理学の職務上の精神は、キャテルの人生と業績に最も代表されているといわれる。彼の心理学は知覚内容よりはむしろ人間の能力に関係したも

のであり、この点では彼は functionalist であらんとした。しかし、ホール (Hall, S. 1844—1924) やジェームズ (James, W. 1842—1910) のように、正式にその活動には参加しなかったのである。勿論彼は心的過程を強調してアメリカの職業精神を主張した。

1. キャテルの生涯

ペンシルベニアのイーストンで生まれた彼は、父が学長をしていた Lafayette カレッジを卒業して、ヨーロッパに行く慣習にしたがって、ゲッティンゲンやライプチヒやヴントのもとに留学した。1883年ヴントの最初の助手になる。彼の大胆な攻勢と自立の精神のあらわれとして、ヴントに次のことを明白にさせた。すなわち、彼は自分自身の研究課題をヴント心理学の主要部分にはほとんどない個人差の心理学を選んだことである。これについてヴントは、全アメリカ的な課題として特色づけられているとのべている。ヴントのこの批評は正当であるばかりではなく、予言的でもあり、個人差についての興味と発達の見解の当然の結果で、これはアメリカ心理学の特色であって、ドイツ心理学にはないのである。

キャテルとヴントの関係はいくぶん緊張気味であったが、決して公に断絶したものではなかった。一言、非常に礼儀正しいヴントはキャテルに対して厳格そのものであった。このような関係にもかかわらず、反応時間の研究の意義については意見の一致をみることができた。それは、いろいろの精神作用のための反応時間の研究、とりわけ個人差研究にとくに有効であると信じた。反応時間についての模範的な研究の多くはライプチヒの3年間に行われた。そこで反応時間と個人差に関するいくつかの研究を発表している。

1886年に学位を得たのち、1年間ペンシルベニア大学で心理学の講義をした。それから、ケンブリッジ大学で講師となった。そこで前述のゴルトンに会い、South Kensington Museum で2～3ヵ月間彼の手伝いをした。この2人は同様の興味と関心をもち、個人差についての意見を同じくしていた。ゴルトンの影響を受けてキャテルの研究範囲は拡大され大へん役に立った。と

くに、ゴルトンの測定と統計に重点をおくことに深い感銘をうけた。その結果、彼は数量化、等級づけ、評価を強調するアメリカでの最初の心理学者の一人となったのである。

1888年ペンシルベニア大学で心理学教授に任ぜられた。この任命は大へん意味のあることであった。というのは、世界のどこでも、心理学の最初の教授職として、心理学の単独の資格を正式に承認されたことである。それは心理学者の初期の大学任命は哲学の部門においてであったからである。

彼は1891年ペンシルベニアに住み、そこで26年間滞在した。その間、コロンビア大学で心理学科の長となった。ホールの“American Journal of Psychology”への不満があり、ボールドウィン (J. Mark Baldwin) とともに、1894年、新しい雑誌“The Psychological Review”をはじめた。1895年に彼は“Alexander Graham Bell”から週刊誌“Science”を手に入れ、5年後、それは科学の進歩のため“American Association”の公刊誌となったのである。その他、何種類かの雑誌を発行していった。

1921年、彼の抱負の一つであった心理学応用の推進を実現した。彼は“American Psychological Association”のメンバーによって獲得した株式を基礎として“Psychological Corporation”を創立した。産業と社会に対して心理学的サービスを与えるこの株式会社は大へん成長し今日もなお活動している。

キャテルは、1944年に死ぬまで心理学の編集長や代表責任者として熱心にその役割を果たした。記載するに足る彼の生涯の一つの方向は、彼によってアメリカ心理学が非常に急速な進歩を遂げたということである。彼は28歳でペンシルベニア大学の教授、31歳でコロンビア省の議長、35歳で“American Psychological Association”の会長、40歳で“National Academy of Sciences”に選ばれた最初の心理学者であった。

2. キャテルの研究

彼の初期の研究、反応時間や個人差の研究における関心については先にのべ

たが、彼の研究範囲の指摘はすでに1914年になされていた。反応時間に加うるに、次の5つの主要領域があった。すなわち、講読と知覚、連想、精神物理学、価値基準の等級、個人差の問題である。しかし、実際キャテルの研究の中心問題は個人差心理学であった。1891年コロンビアにいたころは、発達とメンタル・テストの主唱への関心は最高のものとなっていたのである。

人間の能力の範囲と変異性を測定しようとするとき、キャテルが使用したテストの種類を考察することは有益なことである。後の知能検査の発達から分類されるように——それは心的能力のより複雑な作用を利用するものである——彼のテストは、より基本的、身体的で、感覚運動神経の測定に役立つものである。彼が利用した基礎的テストは次のものを含んでいる。すなわち、力量計圧力、運動速度（いかに早く手を50センチ動かすことができるか）、2点の出発点を使っての感覚範囲、圧力痛（額への圧力量が痛みの原因に必要である）、体重における顕著な差、音への反応時間、色の名称をいう時間、50センチの線の2等分、10秒の時間弁別、一つの提示後それを思いだすことのできる文字の数である。

1905年フランスの心理学者ビネー（Binet, A.）がヘンリー（Henri, V.）とシモン（Simon, Th.）とで、よい高い精神能力の複雑な測定を使って“intelligence test”を開発した。このアプローチは、知能のより効果的な測定を行い、知能テストのすばらしい発達の始まりでもあった。

キャテルの影響は、メンタル・テストの活動を維持したり、奨励するのに大いに役立った。彼の学生であったソーンダイク（Thorndike, E. L.）は、アメリカでメンタル・テストの心理学における指導者であり、コロンビアは暫らくテスト活動におけるリーダー的大学となったのである。

キャテルは、ゴールトンの初期の研究をうけついで、1902年に開発した価値体系の方法を用いて、有名なアメリカの科学者を対象に、各科学分野の順位について有能な人間があてはめられた。これをまとめたものが“American Men of Science”であることは周知の如くである。これら、キャテルの一連の研究が、わが国の偉人・天才研究や優秀児 gifted children 研究にとり入

れられ、また、知能テスト作成に大いに貢献している。

アメリカ心理学におけるキャテルの活躍は1つには心理学の実践的適用を奨励したことである。そして、その2はメンタル・テストや個人差の測定、応用心理学の発展と普及を通して、彼は精力的に心理学における職務活動を推しすすめていったことである。

個人差心理学は非常に実用的なように思われる。我われは既にアメリカ実用主義的精神や機能的な方向づけについてのべてきたが、まさにアメリカはそれを望むお国がらであり、ジェームズやホール、キャテル、その他の率先者の努力で国を挙げて積極的に応用することであった。

アメリカ心理学の刺激的活気のある発達には1880～1900年の間で、科学における最も著しい時代であった。1880年には研究室はなかったが、1895年には研究室の数が24となり、1880年には雑誌はなかったが、1895年には3つも出版された。1880年にはアメリカ人は心理学を研究するためにドイツに留学したが、1900年には成長しつつある自分の大学で研究することができるようになった。そして、心理学は大学でさかえ、1893年シカゴの万国博覧会で一般公開される前にお目みえした2人の心理学者ミュンスターベルヒ (Hugo Münsterberg) とジョストロウ (Joseph Jostrow) は、人びとがその才能を少しでも学ぶことができる実験的研究室は勿論、器械装置の公開をしたのであった。このような一般公開はヴントでさえも目をむけなかったことである。

このようなことから、心理学の進歩はヨーロッパよりもアメリカにおいてより急速に発展した。実際、ヨーロッパで心理学が創始された後40年、アメリカは少なくとも量的に優位にたって今日に至っている。

要 約

筆者は差異心理学の発展に貢献したイギリスのゴールトンとアメリカのキャテルをとりあげて、彼らの生涯と業績についてのべた。

第2次大戦後の日本の心理学は、アメリカの民主教育にもとづいて、個性尊重の教育がさけばれ、その線にそって急速に発展してきた。その一つが個人差

心理学にまつわる諸問題であった。すなわち、知能や学力、性格や個性といったパーソナリティーに関するものである。その二は臨床心理学の発達と普及である。今日のように、社会機構が複雑となり変化していくにともなって、さまざまな不適応症状（適応異常）を示す人が多くなったからである。したがって、先進国ほど臨床心理学上の問題が深刻化してきている。この基礎的理解に個性心理学、差異心理学が重要な役割をもつからである。

参考文献

- 1) Duane Schultz : A History of Modern Psychology. 1975
- 2) Anne Anastasi : Individual Differences. 1967
- 3) Robert S. Albert : Genius and Eminence. 1983
- 4) 高嶋正士：差異心理学研究の歴史と展望 第47回日本心理学会発表論文集 1983

(本学・非常勤講師)